第10回
WMC
セミナー

2026年 11月12日（木）16:30～
会場：府中キャンパス 2号館 21教室

申込不要

Zoom同時配信
URL：https://tuat-jp.zoom.us/j/86569208125?pwd=sAFypBFPQZSyoyPj4i2mpwJzqmb3bk.1
ミーティングID：865 6920 8125　　パスコード：604500

※発表は英語ですが、宮下絵夢フェリチタス先生(Rn,NP)の通訳が入ります

タンザニアの保護地域ネットワークにおける社会生態学的指標の変動



講師：クリスチャン・キフナー氏
（オンライン出演）

所属：ライプニッツ農業景観研究センター(ZALF)
研究分野：「土地利用とガバナンス」

保護地域（PA）は世界で最も一般的な保全モデルですが、その保全成果がどのように、そしてなぜ異なるのかについての既存の研究は依然として不足しています。この議論に貢献するため、タンザニアのタランギレ生態系にある保護地域（PA）ネットワーク全体で7種の草食哺乳類の密度と時間的傾向を評価し、19種の人間と野生生物の相互作用を評価しました。5つの保護地域内で季節ごとの野生生物調査を実施し、隣接する村で構造化された質問票を作成しました。私たちの研究は、2つの国立公園、2つのコミュニティベースの保全地域、および管理能力が限られている1つの狩猟管理地域に焦点を当てました。いくつかの生態学的指標（野生生物の密度とその時間的傾向）と人間と野生生物の相互作用（利益、コスト、違法利用に関連する草食動物と肉食動物の種の数）を抽出し、一般化線形モデルを使用して保護地域間で比較しました。広大な国立公園やコミュニティベースの保全地域ほど、安定した、多くの野生動物の種が確認できます。場合によっては、これらの野生生物の個体群動態は保護区境界付近での人間と野生生物の負の相互作用と関連していましたが、これは一貫したパターンとして現れませんでした。国立公園もまた、年間の個体数減少傾向や境界付近での人間と野生生物の負の相互作用と関連している可能性があります。狩猟管理区域は生態学的指標と人間と野生生物の相互作用指標の両方で最も低いスコアを示し、実践的な管理の重要性を強調しました。我々の調査結果は、同じ生態系内であっても保護区の成果は大きく異なり、地域の社会生態学的状況がその持続可能性に影響を与える可能性が高いことを示唆しています。

世話人代表：諸澤崇裕（魚類・野生動物生態学研究室）
問合せ先：
野生動物管理教育研究センター
wm-center@m2.tuat.ac.jp / 042-367-5861